

主 題：にせ教師の問題

聖書箇所：ペテロの手紙第二 2章1-3節

きょうはⅡペテロ2章から学んでまいります。

まず1節に「しかし、イスラエルの中には、にせ預言者も出ました。」とあります。ペテロは旧約の時代における出来事をいま一度教会の者たちに思い起こさせます。前回見たように旧約の時代にはたくさんのにせ預言者たちが存在していました。エレミヤ14：14に「主は私に仰せられた。『あの預言者たちは、わたしの名によって偽りを預言している。わたしは彼らを遣わしたこともなく、彼らに命じたこともなく、語ったこともない。彼らは、偽りの幻と、むなしい占いと、自分の心の偽りごとを、あなたがたに預言しているのだ。』」とあります。確かにこういう預言者たちが神のメッセージでないことをあたかも神のメッセージであるかのように伝えていたわけです。そして「同じように、」と続きます。「あなたがたの中にも、にせ教師が現われるようになります。」、ペテロは、にせ預言者やにせ教師というのは過去だけではなくてこれからたくさん出てくると教えます。もちろんペテロはそういうにせ教師たちが教会の中に入り込んでいることを知っていました。ですからこの手紙が記されたのだと。これは何も恐れ怪しむことではなくて、実は主ご自身が警告をなさっておられました。「そこで、イエスは彼らに答えて言われた。『人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私こそキリストだ。』と言って、多くの人を惑わすでしょう。』」、「また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。」と。マタイ24：4-5と24：11をお読みしたのですが、もちろんこれは艱難時代の話だと私たちは知っています。しかし、旧約の時代においてもそうだし、ペテロたちの初代教会の時もそうだし、それ以降もそうだし、そしてこれから先においてもこういった人々が必ず出現するとみことばは言うわけです。

ですからペテロはここで一体どういう目的を持って彼らがやって来るのか、その謀略はどういうものなのかを明らかにしようとしています。気をつけなさいと言うわけです。でも同時にこのメッセージは、今の私たちにとっても非常に大切です。なぜかというと、今私たちの周りにもこういったにせ教師たちがいる可能性が高いからです。しかも我々の教会だけではなくて、世界的にキリスト教会を見た時に、間違いなくにせ教師たちはいます。しかもたくさんいます。ですから私たちは彼らの謀略をしっかりと知ることが必要です。そこで今朝私たちはこの2：1-3を通して、教会におけるこのにせ教師たちの働きを一緒に見て行きます。

A. にせ教師たちの働き：

1. 「異端を持ち込む」 1節

まず最初に彼らは何をするかということ、1節に出てくるのですが、教会の中に異端を持ち込むという働きをします。「あなたがたの中にも、にせ教師が現われるようになります。」とペテロは言いました。そしてその後「彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み」と記しています。

1) 「異端」

多くの皆さんは「異端」ということばを聞いて大体の意味はおわかりになると思いますが、念のために「異端」とは一体何かと言うと、広辞苑を見ると、「正統（正しい教え）から外れていること」、また「時代において正統とは認められない思想、信仰、学説である」と定義しています。しかし、私たちが知りたいのは聖書的に言うてどうなのかです。この「異端」という名詞の語源は「選ぶ」、「選択」という意味があります。「人によって選ばれた教理や意見」という定義もあります。また「謬説」、余り使いませんが、「間違った考えや説明」というふうに説明するギリシャ語の辞典もあります。またヴァインという有名な神学者の方の書いたギリシャ語辞典においては、このことばはこういう意味だと説明しています。「真理の顕現への服従にかわるものとしての意見、特にわがままな意見である」と。つまり神様のおことばという真理、当然私たちはそれに従うべきものなのに、それにかわるものを彼らは用いるということです。それが自分たちのわがままな意見であると。ですからこのにせ教師たちが「異端」を持ち込むことによって教会の中に何が起こるかということ、間違いなく教会の中に分裂であったり、分派というものができてきます。

というのは彼らは、神の真理を伝えるかわりに自分たちの考えをあたかもそれが神の真理であるかのように伝えるからです。そうすると、当然聞いている者たちの間では一体何が真理なのだろうと混乱が生じます。ですからAにつくとかBにつくとかいうことで当然教会の中に分裂、分派というものが生じて来る。そしてこれこそ「異端」の意図するところです。これこそにせ教師たちが意図するところです。聖霊なる神様はイエス・キリストを信じる者たちを一つにしようとする。教会の中に一致をもたらそう

とする。でもこういった悪は、さまざまな形でそれを壊そうとするわけです。にせ教師たちはこの「異端」を密かに持ち込み、わからない方法でこの働きをなすのだとペテロは警告するわけです。

少し考えていただきたいのは、たとえにせ教師たちが「異端」を密かに教会の中に持ち込んできたとしても、例えば「主イエス・キリストは神ではありません。」と言われたら、皆さんはもうすぐその時にこれはおかしいと赤旗を挙げます。「聖書が神のことばでない」とか、「聖書の中に間違いがある」などと言われたら我々はすぐに赤旗を挙げて、これはおかしいという反応を示します。なぜならそれは明らかに私たちの聖書に記されている真理と違うことを教えているからです。でもこのにせ教師たちは、教会の中に入り込んできて、教会の中である程度信頼を勝ち取っていくのです。でなければこういった働きを教会の中でなすことはできません。正しくない誤った教えではあるのですが、それを信じるためには、その人たちに信頼がなければ信じません。実はこの箇所が我々にそのことを教えてくれるのですが、彼らはどういうことをするかというと、彼らは確かに口においては私たちが信じている真理を肯定するのです。「イエスが神である」とか、「イエス・キリストによっての救いである」とか、「十字架と復活によって神様が救いを備えてくださった」とか、「信仰によって救われるのだ」とか、「神が与えてくださったこの聖書のみことばに誤りは無いのだ」と。聖書の無謬性やいろいろなことを肯定します。でなければ、彼らを教会に迎えることはしないはずですが。

でも彼らの意図するところは神の栄光を現そうとしているのではないのです。言ったように、こういう「異端」を密かに教会の中にもたらし、教会の中にそういった悪の働きをもたらすことによって、サタンが望んでいることを教会の中になそうとするわけです。山上の説教でイエス様がにせ預言者たちに気をつけなさいと言われたのを思い出します。マタイ7：15で「彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。」と言われました。イエス様が言われたように、「狼」だったらみんな警戒しますが「羊のなりをしてやって来る」のです。みんなは彼らを受け入れるのです。そして大変なことが教会の中に始まっていくのです。

2) 「異端がもたらすもの」：「滅び」 ヨハネ17：12、ローマ9：22、ピリピ3：19、Ⅱペテロ3：7

そして彼らのもたらす「異端」が一体何かと言うと、「滅びをもたらす異端」と説明されています。この「滅び」という名詞は「滅亡」や「破滅的異端」と訳している辞書があります。このことばは新約聖書の中に18回出てきます。それを見るとどういう意味でこのことばが使われているのかがはっきりします。

例えばヨハネ17：12では「滅びの子が滅びました。」とイエス様が言われました。「それは、聖書が成就するためです。」と。ここで「滅びの子」という表現を使ってある人物を指しています。だれのことかというイスカリオテのユダのことです。彼はほかの弟子たちと同じように救いのチャンスがあったにもかかわらず、救いを拒み続けて神のみわざではなくてサタンのわざをするのです。また十字架の敵として歩んでいる者たちに対してピリピ3：19でパウロはこう言います。「彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。」と。十字架の敵として歩んでいる者たちに対して「彼らの最後は滅び」だとパウロは言ったのです。ここにも同じことばが出てきます。またこのⅡペテロ3：7でも「今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。」と、またこのことばが出てきました。この「滅び」ということばが何を意味しているのかももうおわかりだと思います。「永遠のさばき」、「永遠の地獄」です。ペテロは、「滅びをもたらす異端を」と、にせ教師たちが滅びる運命にあるだけではなく、「滅び」をもたらすような間違った教えを教会の中に持ち込んで来ると言っているのです。このにせ教師たちの教えていることは、救いをもたらすものではありません。地獄に行くことを選択をしているこのにせ教師たちが自分たちと同じように永遠の滅びに至る道連れにしようとしてこのような働きをなすのだとペテロは教えます。

3) 「異端の核心」：どのような異端を持ち込むのか？

そして「異端」の核心部分を少し見てください。1節に「自分たちを買い取ってくださった主を否定するようなことさえして」とあります。にせ教師たちが「異端」を教会の中に持ち込むわけです。彼らは真理でないことを真理として教えるのです。その中でもこれが特筆されています。「自分たちを買い取ってくださった主を否定する」と。

まず見ていきたいのは、ここで使われている「主」ということばです。「奴隷に対しての主人」とか「所有者」という意味があります。この「主」ということばは新約聖書に10回しか出てきません。私たちが主イエスと言う時に使うギリシャ語は「クリオス」というギリシャ語を使います。ここではこのギリシャ語が使われていません。10回しか出てこない中で、2回は「神」についてこのことばが使われています。ルカ2章や使徒4章がそうです。またあと2回は「キリスト」についてこのことばは使われています。このペテロ2：1とユダ4です。あと残った6回は「奴隷と主人の関係における主人」という意味で使われています。そうすると、この「主」というのは「キリスト」を指しているわけです。「自分

たちを買い取ってくださった主」、キリストを「否定するようなこと」を彼らはしていたのです。

もう一つ見ると、この「買い取」ということばです。これは「市場で買う」ということです。市場に行って代価を払って奴隷を買う。贖いということばを私たちが学んだ時に、そのことばが意味していることは、そうして市場で金銭を払ってその人をその市場から買い取って自分の所有にすることであると、まさにこれが救いだということをもう何度も見てきました。イエス様はご自分のいのちをあなたを買い取るための代価として払ってくださって、罪の中から、罪のさばきから、罪の束縛からあなたを「買い取ってくださ」り、神のものとしてくださった。

さて、ことばの意味はわかりました。「自分たちを買い取ってくださった」、自分たちのために代価を払って神のものとしてくださった。それを否定するようなことを彼らはしていたのです。つまり彼らはこの救いというものを否定しているということです。最初の話思い出してください。このにせ教師たちが教会に入り込んできた時に、彼らは我々が信じている聖書の教えている大切な教理を肯定しているわけです。口では間違いなくイエス・キリストの救いというものを信じていると語っているのです。でもこの箇所が私たちに教えてくれるのは、確かに口ではそんなことを言っているけれども、心ではその教えを信じていないということです。しかもこの「否定する」という動詞は現在形を使っています。彼らはずっと継続して習慣的に否定し続けているということです。どんなに口で立派なことを言っても彼らの心に問題があると言うのです。こういったことを信じていると言いながら、彼らの心ではそれを信じていないということがここに記されているのです。彼らはずっと初めから主の救いを否定し続けているのです。いつまでたっても悔い改めて救いを信じようとはしないのです。かえって彼らは神に逆らい続けている。こういったにせ教師たちが教会の中に入り込んでいます。私たちの間にもそういう人が入ってくる可能性があるのです。

◎ にせ教師を見抜く方法

そうすれば私たちが知りたいのは、ではどうやって彼らを見分けることができるのか、彼らが本当の教師なのかそうでないのかを見抜く方法はないのか——。実はちゃんとあるのです。最初にお読みした山上の説教、マタイ7：15「にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。」の後、話が続きます。「あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。」、確かに外側は羊の格好をしているけれども、あなたたちは本当の姿を見分けることができるのだと。どうしたらいいのかというと、「ぶどうは、いばらからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。」(マタイ7：16-20)、このイエス様のメッセージはその人が何を言うかではなくて、どんなふうにいるかだということです。ペテロはこの後そのことを私たちに教えてくれるのです。

このにせ教師たちは、「自分たちを買い取ってくださった主を否定」していました。代価を払って、つまりいのちを払って私たちが買い取ってくださった主を否定しているのです。ということは、彼らは救われていないのだという話をしました。では救われている私たちは、代価を払って私たちが買い取ってくださった主を受け入れる者たちです。このにせ教師たちは代価を払って私たちが買い取ってくださる、この主を否定したのです。彼らはこのイエス・キリストの主権に従おうと思いません。彼らは自分たちの人生は自分たちのものだと言って、自分たちの好きなように生きようとしています。しかし、我々救われた者たちは大切な真理を知ったのです。それは、救いというのはただ天国への切符をもらったのではない。救いというのは、この神であられる方、すべてをお造りになった主なる神に私はすべてを捨てて従っていきますと決心することです。それまでの私たちはサタンにすべてを捨てて従ってきていたのです。サタンが喜ぶことは罪です。ですから私たちは罪を犯しながらサタンを喜ばせてきたのです。でもそこから救い出された私たちは新しい主人である神を喜ばせるように生きていこうとする。この方に従っていこうとする。これが救いだ。ですから言い方をかえれば救いというのは主権者なる神、このすべての創造主なるまことの神、しかも我々のために救いを備えてくださった、この救い主なる神をただ信じるだけではない、この方を主人として、この方に従って行くという選択を私たちはしたのです。にせ教師たちはそれを否定したのです。

私たちクリスチャンが思い出さなければいけないのは、私たちはイエス様あなたについていきますと決心したことです。あなたは私の神です、あなたが私の救い主です。あなたは私の主人です、私はあなたについていきますと。そうして私たちはその主が私たちに語ってくださっているこのみことばに従って生きていこうとするのです。そういう人へと私たちが生まれ変わった、それが救いなのです。イエス様がヨハネ8：47で語っていることを思い出してください。「神から出た者は、神のことばに聞き従います。ですから、あなたがたが聞き従わないのは、あなたがたが神から出た者でないからです。」と。イエス様は明確

に救いを受けている者とそうでない者の違いをお話になっています。この救いにあずかった者たちは神に従っていかうとするのです。確かに、私たちは失敗だらけだし、嫌になるほど何回も罪に対して敗北を喫しています。でも神が救ってくださったならば、あなたの心の中にはこの神を愛する思いが、この方に従っていききたいという新しい思いが与えられたのです。ですから、クリスチャンであるあなたの中にはこの神様に従っていききたい、神が喜ばれることをしていきたい、そういう思いがあるのです。でも実際の生活はというと、そうでないことを何回も繰り返している。私もいろいろなところでクリスチャンたちと話をする時に、自分は本当にもうだめだとか、こんな自分は救われていないと、救いの確信を失っている人たちがたくさんいます。世界じゅうどこを見ても、罪を犯さないクリスチャンというのは存在しません。すべての点で完璧に生きるクリスチャンは世界じゅうどこを見てもひとりもいません。私たちは地上にいて神に喜ばれることをしたいという思いを持ちながらそうでないことをしている。自分の中で葛藤しているのです。苦しんでいるのです。だから私たちは早くこの罪の体を脱ぎ捨てて、栄光の体を着たいと願っている。でもみことばが教えてくれるのは、救いにあずかったならば、あなたの中にはこの神に従っていききたい、この神が命じていることを行っていききたいという思いが与えられるということです。

そこでもう一回マタイ7：21-23を見てください。イエス様は実によって見分けることができると言われた。21節「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。」とあります。イエス様の言われていることは全部同じです。イエス様が言われたのは、「わたしの父のみこころを行なう者が」、つまり神様のみこころに従っていききたいと言う人が天に入るのだと。では最初の人がどういう人かということ、口先だけの人です。「主よ、主よ。」と口で言っている人です。それはその後出てきます。「その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」と。救われていると思っていたけれども、実は救われていなかったということが明らかになるということです。

彼らはいろいろな奉仕をしているから私は救われているとか、いろいろな奇跡も行ってきたからと思っているのです。確かにいかにもクリスチャンであるかのような振る舞いをしてきたのです。しかし、イエス様はあなたのことを知らないと言われた。なぜかということ、彼らは神のみこころに従っていない、従おうとしていないのです。そこで23節に「不法をなす者ども」とあります。同じ人たちの話です。これは主のみこころに反することの話です。きよい神が忌み嫌われるけがれを、この「なす」という動詞は継続して習慣的に行い続けているという意味です。それがその人の特徴になっているのです。ずっと同じことを継続して行い続けているのです。神のみこころに反することを、神が忌み嫌うことを平気で行い続けている人の話です。神に従いたいと思いつつ、それでいい歩みをしている人たちの話をしていいるわけではありません。ここに記されている人は、ある程度の知識は持っています。でも生き方はというと、神のみこころに従っていないし、神のみこころに反することを習慣的に平気で行い続けている人です。

ですから、みことばが我々に教えてくれていることは、きょうのテキストに戻っていただくと、ペテロが私たちに教えてくれました。主イエス・キリストの救いにあずかっている者たちは自分たちを買い取ってくださった主を肯定してその方信じ、受け入れ、その方に従っている者たちです。でもこのにせ教師たちは、自分たちを買い取ってくださった主を否定していると。救いを与えてくださるその主を彼らは継続して否定し続けていると。神に逆らうことを行っている、そこに罪悪感も出てこない、そんな人たちのことです。自分たちの身に「すみやかな」滅びを招いている人たちはです。ペテロはこのにせ教師たちに対して、偽りの教えに惑わされている者たちに対する警告を与えています。自分たちの身に永遠の滅びを招いていると。ペテロがここでそのような永遠の滅びを自分の生活に招いているのはあなたの罪が原因だと言うわけです。なぜなら彼らはこの救いを自分の意思でもって否定し続けているのです。その結果として彼らは永遠の滅びを自分自身に招いているのです。この「すみやかな」ということばは、緊急性を表すことばです。差し迫った話です。ペテロが言っているのは、あなたに対するさばきはもう間もなく来るということです。多くの人たちはまだまだイエス様を信じる機会があると思っています。聖書が警告しているのは、あなたが思っているほど長くはないと。その終わりがいつ来るかはわからない。チャンスのある時に悔い改めてその救いを受け入れるようにと神は命じています。神の真理に従うよりも自分の肉欲に従って生きることを愛し、選択している者たち、彼らに対しては注意していないと間もなく「すみやか」にそのさばきがあなたに訪れると警告するのです。

2. 「不道徳を持ち込む」 2節 エレミヤ23：14

1) 「不道徳がもたらす影響」

このにせ教師たちが「異端」をもたらしました。実はそれだけではない。2節「そして、多くの者が彼

らの好色にならい、そのために真理の道がそしりを受けるのです。」とあります。実はこの教師たち、預言者たちの問題というのはこの時代もそうですし、旧約の時代もそうでした。彼らは教会の中にこういった不道徳を持ち込んだのです。エレミヤ23：14に「エルサレムの預言者たちの中にも、恐ろしい事をわたしは見た。彼らは姦通し、うそをついて歩き、悪を行なう者どもの手を強くして、その悪からだれをも戻させない。彼らはみな、わたしには、ソドムのもようであり、その住民はゴモラのもようである。」と。つまりこういう預言者たちが不道徳を重ね、大変な罪を犯していたのです。

そこでペテロはこのにせ教師たちが入り込んで来て、にせ教師たちがもたらすその悪について、こう話しています。「多くの者が彼らの好色にならい」、つまり彼らが持ち込むその不道徳によって、教会全体が影響を受けるのです。「好色」ということばは「不道徳」、「ふしだらな行動」、「習慣的な性的不道徳」です。また「異性への性的誘惑」であったり、辞書によれば「放逸な欲望」と書いてあります。節度をわきまえないことです。勝手気ままに振舞っている様子です。特に性的なことです。ユダは4節で「ある人々が、ひそかに忍び込んで来たからです。彼らは、このようなさばきに会うと昔から前もってしるされている人々で、不敬虔な者であり、私たちの神の恵みを放縦に変えて、」と、「放縦」ということばが出てくるのですが、このことばと今私たちが見ているⅡペテロ2：2の「好色」ということばは同じギリシャ語を使っています。つまり、にせ教師たちが入り込んで来て、彼らがすることは、こういうふしだらな性的な罪を教会の中に持ち込むのです。彼らは「何をしたって赦される、恵みだ」と言うのです。ユダ7節にも「ソドム、ゴモラおよび周囲の町々も彼らと同じように、好色にふけり、不自然な肉欲を追い求めたので、永遠の火の刑罰を受けて、みせしめにされています。」とあります。教会の中にこういった性的不道徳がにせ教師たちによってもたらされて、その影響が教会の中に広がっていく様子です。ここに「ならい」ということばが出てきます。これはそれに従うということばです。このにせ教師たちの教えや振る舞いに彼らはならって、従って生きていく様子です。このにせ教師たちがもたらす教え、そして彼らの生き方を通して示される教え、教会を罪へ罪へと導いていくのです。

きょうも私たちが見て来たように、悲しいことにこうしたにせ教師たちの性的な罪が教会の中に入り込んで来て、そういう生き方に従って行く者たちが大勢いる、多くの者がそれにならうと書いてあります。ということは教会の中で、クリスチャンだと思っていながらそうでない人もたくさんいるわけです。そして、あたかも羊であるかのような人が入り込んで来て、彼らが教えてくれることは自分たちの肉にとってもありがたい話です。こういう人たちがこういう生き方をしているからそれにならって生きていきましょう、そしてそういう罪へと多くの人が陥ってしまうという話をしているのです。もちろんこういった好色だけではなくて、にせ教師たちの影響力というのは大変大きいことを我々は知っています。先ほど見たマタイ7：13でイエス様はこう言われました。「狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからはいって行く者が多いのです。」と書いてあります。イエス様は何を警告されたのかというと、イエス様が言われた救いというのは大変「狭い門」を言われている。イエス様はあなたは自分の持っているすべてのものよりも私を愛するかと問われた。私をだれよりも愛するかと。すべてのものを捨てて私についてくるかと問われた。残念ながら、キリスト教会の中では救われる人が少なくなるから、こういった厳しい、いろいろなことを要求されるような福音のメッセージが語らなくなりました。かえって人々が救われやすいメッセージを語るようになってきた。どんなメッセージかというと、天国と地獄、どっちがいいですか？天国でしょう？イエス様を信じなさい。極端な話を言えばそういうことです。でもそこには何の悔い改めもないのです。そこには神だけを愛する、神を一番に愛してこの方に従っていこうとする、そんな決心もないのです。ただイエス・キリストを受け入れるという。悲しいことにイエス様が言われた救いというのは「狭い門」なのです。ところが人間が勝手な人間の愚かな知恵でもってその救いの門を大きく開いたゆえに、今のようなメッセージが語られるようになってしまった。

皆さんに考えていただきたいのは、人間が、罪人が救われるために考え出したハードルの低い救いのメッセージが人を救うことができるのかどうかです。もっといえはそんなメッセージを語ることを神が私たちに命じておられるのかどうかです。それを聞いておられる神が喜んでおられるのかどうかです。でも実際にもうそういうことが私たちの国でも起こっているのです。福音のメッセージがこのようにハードルの低いものになってしまっている。でも聖書の中を見た時にイエス様が言うておられるのは、大変厳しいことです。それを完璧にしなればあなたを救わないと言っているのではないのです。でもそれが真理だからそれに従っていこうとするのです。私たちが注意しなければいけないのは、教会にたくさんの人たちが集まっているからと言って、その教会が祝されているとは必ずしも言えないということです。教会を測るメジャーは数ではなくて質なのです。その教会に何人集まるか、どんな建物なのか、どうでもいい話です。そこに集まっているクリスチャンたちが本当にみことばに立っているのかどうかです。何よりも神を愛しているのかどうかです。偽りの教師たちはそういう教会の中に羊の顔をして入っ

てきて、そして間違っただけをもつて教会を混乱へと導いていきます。我々はもう一度この聖書に立ち返らなければいけない。こういう警告をペテロは私たちに与えてくれたのです。

2) 「不道徳がもたらす結果」

そういう神の働きによってどういう結果がもたらされるのかを見てください。「そのために真理の道がそしりを受けるのです。」と続きます。「そしりを受ける」、悪口を言われるのです。侮られるのです。どういうことかということ、本来教会が持っているはずの証を失うということです。ここで言われていることは、こんなことを教会がしていると、世が教会を非難するのです。本来ならばきよい神の証をこの世に輝かせるはずの教会が不品行によってこの世から非難を受けるようになってしまう。本来は罪人に渴きをもたらして神へと導くはずの教会が彼らを教会から、またこのすばらしい救いから遠ざけてしまう。これは悲劇です。そういうことになるとペテロは警告するのです。

3. 「貪りを持ち込む」 3節

1) 「貪りの影響」 ミカ3：11

そして最後に、にせ教師たちはこういう不道徳だけではない、貪りを持ち込むのです。3節「また彼らは、貪欲なので、作り事のことばをもつてあなたがたを食い物にします。彼らに対するさばきは、昔から怠りなく行なわれており、彼らが滅ぼされないままではあることはありません。」、教える立場にある人は、教えを受ける者たちの霊的成長を願いながらその働きをします。でもここにあるように、このにせ教師たちはそれによって私腹を肥やすためにこの働きをします。ですから、「あなたがたを食い物にします」と書いてあります。会衆から彼らが富を巻き上げて行くことです。自分が豊かになるためこのようなことをすると言うのです。

実は旧約聖書の中にもそういった人たちがいました。ミカ3：11には「そのかしらたちはわいろを取ってさばき、その祭司たちは代金を取って教え、その預言者たちは金を取って占いをする。しかもなお、彼らは主に寄りかかって、『主は私たちの中におられるではないか。わざわざは私たちの上にかかって来ない。』と言う。」と、同じような問題が確かに旧約聖書の中にもあったのです。

2) 「貪りの手立て」 IIテモテ4：1-4、I列王記22：1-28

そしてどのようにしてそのような働きをするのかということ、手立てを見てください。ここに書かれているのは「作り事のことばをもつてあなたがたを食い物に」とすると、自分たちが作り上げたことばです。そういう自分たちのことばを巧みに使って人々を惑わして、結果的に自分たちの私腹を太らせようとするのです。そういった偽りの教師たちが入り込むと言うのです。おもしろいのは、人々はこういった「作り事のことば」に関心を寄せると言うことです。もしその教会が、教会員たちが神のことばに立っているのだったら、そうでないメッセージが語られた時に、教会員がそれは違うと言うわけですが、でも悲しいことにこのような「作り事」のメッセージを聞いた時に、それに心を開くのです。どれだけ多くのクリスチャンたちが、多くの教会が神の真理に立っていないかということ。立っていないければこういった危険があるわけですが。

パウロが「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言うてもらうために、気ままな願いをもつて、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、真理から耳をそむけ、空想話にそれで行くような時代になるからです。」とIIテモテ4：2-4で言っています。彼らは「自分につごうの良いことを言うてもらうために」、都合のいい教師たちを集めると言うのです。つまり教会の中で教会員たちが自分たちが聞きたいことを話してくれるような教師を集め始めると言うのです。この「気ままな願いをもつて」の特に「願い」というのは、自分自身の「願望」とか「欲望」です。そういうものを持って教師たちを集めると。繰り返しますが、教会が教会員たちが聞きたいことを語ってくれる教師たちを集めるようになります。だからそうでない教師たちはお払い箱です。でもパウロが言ったように、「みことばを宣べ伝えなさい。……寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。」と。みことばはそういうものです。神は私たちが愛するがゆえに私たちの間違っているところ、それを悟らせてくださる。そこから立ち返るためです。それを悔い改めるためです。そうして神に喜ばれる者へと変わっていくためにです。でも教会自体がもうそういうことを望まず、自分たちが聞きたいことを語ってくれる教師たちを集めて行くといった動きは世界的に今起こっています。悲しいことに私たちの国でもそういう牧師たちの影響を受けている牧師たちがたくさんいます。だから教会の中で罪やさばき、永遠の地獄といったことを語らなくなってきた。あなたの罪を悔い改めなさいなどという話をしなくなってきた。そんなのは責められるから、聞いている者が苦しくなるから、聞いていて楽しいメッセージをと。そういうことは神様が言われたことではないのです。にせ教師たちがそういう教えを持ち込んだからです。

パウロはこうして教会に関しての警告を発しました。でも同じようなことが旧約でも起こっています。時間の関係で短い説明しかできませんけれども、イスラエルにアハブという王様がいました。イスラエルとアラムとの間にはもう約3年間戦いがなく、平和な時代でした。ところがこのアハブはラモテ・ギルアデを何とかアラムから取り戻したいと思っています。そこでやって来たユダの王様ヨシャパテと一緒に戦ってくれないかと願います。そしてこの二人の王が結託して戦いを挑むわけです。戦いを挑む前に、アハブはイスラエルの400人の預言者を呼んで来て、このアラムに攻め入ることは神の前に正しいことかどうかと聞くわけです。400人とも正しいことだと答えます。そこでユダの王ヨシャパテは、ここには私たちがみこころを求めることのできる主の預言者がほかにいないのですかと問います。そうすると、アハブはいや、もうひとり私たちが主のみこころを求めることのできる者がいます。しかし、私は彼を憎んでいますと言うのですが、その預言者ミカヤを連れて来るのです。そしてミカヤに攻めることはどうなのかと聞くわけです。ミカヤは「どうぞ攻めたら？」と答えます。それを聞いたアハブはうそを言っていることがわかったから「正直に言えないのか」と怒るのです。その時にこの預言者ミカヤが非常におもしろいことを言っています。「そのとき、主は仰せられました。『だれか、アハブを感わして、攻め上らせ、ラモテ・ギルアデで倒れさせる者はいないか。』すると、あれこれと答えがありました。それからひとりの霊が進み出て、主の前に立ち、『この私が彼を感わします。』と言いますと、主が彼に『どういふふうにするのか。』と尋ねられました。彼は答えました。『私が出て行き、彼のすべての預言者の口で偽りを言う霊となります。』すると、『あなたはきっと感わすことができよう。出て行って、そのとおりにせよ。』と仰せられました。今、ご覧のとおり、主はここにあなたのすべての預言者の口に偽りを言う霊を授けられました。主はあなたに下るわざわいを告げられたのです。』(Ⅱ列王記22:20-23)、こうしてこの預言者たちを使って、アハブをさばくということ、そのために攻め入りなさいと告げたと言うのです。それは勝利するためではない、そこで彼が死ぬためだと。つまりこういう偽りを言わせるように霊が働いたと言うのです。

この話の問題はアハブ自身のことばがそれを教えてくれます。アハブはこの預言者ミカヤのことを憎んでいました。彼はこう言いました。「私は彼を憎んでいます。彼は私について良いことは預言せず、悪いことばかりを預言するからです。」と。ほかの預言者はみんな私が聞きたいことを言ってくれるのに、こいつだけは私が聞きたくないことを言うからだ。つまりこの王は自分のしたいことに賛同してくれる預言者の声だけに耳を傾けていたのです。しかも、こういう態度は王様だけではなかったのです。実は13節でミカヤを呼びに行った使いの者がこう言います。「いいですか。お願いです。預言者たちは口をそろえて、王に対し良いことを述べています。お願いですから、あなたもみなと全く同じように語り、良いことを述べてください。」と。「良いこと」ということばはヘブライ語の「トブ」ということばで、「快い」とか「好みに合う」とか「合意できる」とか「サインを示す」という意味です。つまり預言者たちも神のことばを語るのではなくて、王様が聞きたいことを語ろうとしていたのです。イスラエルのアハブは自分が聞きたいことを聞きたいと願っていて、そしてそれにこたえた預言者たちは王が聞きたいことを語っていたのです。だから彼らは感わされたのです。でもこのミカヤは違いました。彼は「主は生きておられる。主が私に告げられることを、そのまま述べよう。」と。彼は王がどう思うかではない、神のメッセージをそのとおりに語ったのです。彼らの問題は、神の真理を知ることにも従うことにも関心はなかったことです。つまり彼らは神よりも人を恐れたのです。これから教会もそうになっていくという話です。神のおことばである聖書の権威がいつの間にか失墜してしまっていて、神のことばよりも人間のことばを優先するような時代になっていくという話です。そういう教会になって行くと。

3) 「貪る者への警告」

最後に警告が出ています。「彼らに対するさばきは、昔から怠りなく行なわれており、彼らが滅ぼされないままに在ることはありません。」、ペテロは最後にこれまでもそうだった、そういうにせ預言者たち、偽りの教師たちに対しては神様のさばきがあると。最初にお読みしたエレミヤ14:14で神が語っていないことを語っていた預言者たちに15節でこう警告されています。「それゆえ、わたしの名によって預言はするが、わたしが遣わしたのではない預言者たち、『剣やききんがこの国に起こらない。』と言っているこの預言者たちについて、主はこう仰せられる。『剣とききんによって、その預言者たちは滅びうせる。』」と。神がさばくとはっきりと教えています。にせ預言者たちは必ずさばかれます。なぜなら彼らは神のことばを語っていると信じながら神のことばを語っていないからです。

私たちがしなければいけないのは、語る者であってもそうでない者であっても信仰者ならばしっかりと神のことばに立たなければいけない。あなたが立つのはこのことばです。あなたが信じるのはこれなのです。あなたの確信はここに置くべきなのです。これが神のおことばです。これだけが神のおことばです。

ピューリタン、清教徒たちですけれども、すごい信仰者がいました。ジョン・ライトフットという人は「本物の神の教会の土台は神のみことばである」と言います。教会の土台はこれだと、人間のことば

ではない。トーマス・ワトソンはこう言います。「すべての聖書の行を読む時に、あなたが考えなければならないことは、神があなたに語っておられるということだ」と。あなたがこの聖書をお開きになって読まれる時に、その一行一行を読む時に、神があなたに語っておられる。そんな思いを持って私たちはみことばを開き、みことばを読んでいるかどうかです。神のことばなのです。ここに立っていないと、偽りの教師たちの惑わしが来ます。教会の中からはだけではない。いろいろなところからそういうものがやって来ます。少なくとも私たちは、このことばにしっかりと立ち、このみことばが教えることを信じてそれに従う者たちでありたいと思います。そのような信仰生活をしっかりと歩んでいきましょう。

《考えましょう》

1. 異端を持ち込むにせ教師たちの意図することは何でしょう。
2. 彼らが持ち込む異端を説明してください。
3. 異端に惑わされないためにはどうすればよいのかをお書きください。
4. みことばにしっかりと立ち、正しく歩み続けるためにはどうすればよいと思われますか。